国立民族学博物館
昭和52年10月5日第1号刊行　ISSN0386-2283
平成25年11月1日発行　第37巻第11号通巻第434号

月刊みんぱく

2013 11月号

特集
渋沢敬三と屋根裏部屋の仲間たち

屋根裏部屋が輝いた日々　渋沢雅英
昭和十年代のアチック　市川信夫
フィールド・サーベイのはじまり　由井常彦
まなざしの広がり　齋藤玲子
民俗学者の絵心　木村裕樹

月刊みんぱく
平成二五年十一月一日発行　第三七巻　第十一号（通巻第四三四号）〈編集・発行〉国立民族学博物館
2013 11

ライン河の畔から

小平（こだいら） 桂一（けいいち）

今の仕事に着いて五年半になる。ある時、ボン市主催の国際交流会で、二人連れの日本人とおぼしき女性に出会った。日本代表団と言えば男性ばかりなのが普通なので、英語で「日本の方ですか」と尋ねると「いいえ、私共はキルギス共和国の代表です」とのこと。失礼を詫びると「日本人に似ているのですか。そう言えば、日本人って、私たちの国の辺りを経て極東に流れて行ったのよね」とのご宣託。

日本からヨーロッパは近く感じられるが、ヨーロッパから日本は遠い。学術外交の推進がドイツ連邦共和国の重要な安全保障政策の柱の一つになっていて、学生・研究者交流のかなりの予算は外務省が出している。外務省会議ホールの演壇の背景は世界地図で、当然中央にドイツが位置している。日本は右手のカーテンを押しやらないと見えない。目立つのは、広大なアフリカ、南アメリカ、中央アジア、インドであり、此処で開かれる学術交流関係の多くの会議の参加者の割合も、それを反映していて、日本が「極東」であることを実感する。

ある時、チューリッヒ工科大学の若い研究者が、はじめての日本滞在について講演するのを聴いた。「日本とスイスはとても似ている。いずれも広大な国土は持たず山ばかり、それでいて高い工業力を誇っている」。しかし「全く違うのにも驚いた。日本人は外国に行くのに海を渡る、スイス人は海に行くのに外国を渡らなければならない」と。確かに日本はユーラシア大陸の東に海を隔てて位置し、それが文化的、政治的にも強い影響を与えてきた。

全く違うのは、外見的な地理だけではない。地学的にみて、スイスは古い地層地域に在る山国なのに、日本は最も活発な火山地震帯に沿って連なる列島である。古来この激しい自然の中で生活してきた日本人の特質は、英語の「レジリエンス（叩かれ強さ、回復能力）」に近いと、此の頃思うようになった。「忍耐強い」「和を尊ぶ」、そして「過去を水に流す」のも、そのための知恵と思われる。東日本大震災後の日本人の姿は、ヨーロッパでも、驚嘆をもって迎えられた。

原子力を引き出すウラン原子は、宇宙化石燃料である。ウランのような重い原子核は、大質量星死期の重力崩壊のエネルギーを吸って合成され、宇宙的年代を経て蓄えられる。地球化石燃料・石炭の急速な消費が炭酸ガスの過剰を齎（もたら）すように、宇宙化石燃料は放射性物質の過剰を生み出す。原爆被災と原発事故を経験した日本から、人類的な「レジリエンス」の知恵を発信したいものだ。

プロフィール
1937年東京都生まれ。日本学術振興会ボン研究連絡センター長、天文学者。「すばる望遠鏡」計画推進で1999年東京クリエーション大賞、菊池寛賞。天文学への貢献で小惑星6500番に名前KODAIRA、2001年カール・シュワルツシルト・メダル。前総研大学長、元国立天文台長、東京大学名誉教授。
主な著書に『宇宙の果てまで』（早川書房）、『大望遠鏡すばる誕生物語り』（金の星社）。

月刊 みんぱく
11月号目次

1 エッセイ 千字文
ライン河の畔から
小平 桂一

2 特集
渋沢敬三と屋根裏部屋の仲間たち
3 屋根裏部屋が輝いた日々 渋沢 雅英
4 昭和十年代のアチック 市川 信夫
5 フィールド・サーベイのはじまり
——渋沢敬三と土屋喬雄の卒論と実証主義 由井 常彦
7 まなざしの広がり
——北海道・樺太、台湾、朝鮮半島の収集資料 齋藤 玲子
8 民俗学者の絵心 木村 裕樹

10 似たモノさがし
屋根から天空へ
久保 正敏
12 みんぱく Information

14 地球ミュージアム紀行
狩猟採集文化のデパート
——インド、アンダマン島の人類学博物館
池谷 和信
16 多文化をあきなう
フェアトレードタウンの世界的広がり
明石 祥子
18 フィールドで考える
世界の空気を追って
谷本 浩志
20 人間学のキーワード
ホモ・モビリタス
印東 道子
21 異聞逸聞
海外で起業するベトナムの若者たち
野上 恵美
22 制服の世界、世界の制服
礼装としての民族衣装
栗田 靖之
24 次号予告・編集後記

特集

渋沢敬三と屋根裏部屋の仲間たち

日本銀行総裁や大蔵大臣を歴任した渋沢敬三。実業家・銀行家として知られる一方、民族学や民俗学、水産史研究など多岐にわたる学問の庇護者としても活躍した。渋沢敬三が主宰し、仲間たちと研究にはげんだ自宅ガレージの屋根裏部屋の博物館「アチックミューゼアム」の収集資料は、みんぱくコレクションの母体ともなった。渋沢の没後五〇周年を記念した特別展「屋根裏部屋の博物館」開催にあわせて、渋沢敬三とアチックミューゼアムの仲間たちの活躍をふりかえるとともに、その研究・収集成果が現在、そして未来の民族学・民俗学の研究にどのように活かされてゆくのかを紹介する。

特別展

渋沢敬三記念事業

屋根裏部屋の博物館

Attic Museum

会期　9月19日（木）―12月3日（火）

場所　国立民族学博物館　特別展示館

屋根裏部屋が輝いた日々

渋沢雅英
公益財団法人渋沢栄一記念財団理事長

大型の共同体

「屋根裏部屋の博物館」の仕事がいちばん盛況を見せたのは、昭和七（一九三二）年ごろから、一〇年余りのことでした。昭和一六（一九四一）年には、館主渋沢敬三自身の編著による『豆州内浦漁民史料』全四巻が日本農学賞の受賞に輝き、同一七年から一八年にかけては、『日本魚名集覧』三巻が発刊され、金田一春彦氏から、「日本方言学上の名著である」と激賞を受けました。

しかしこの博物館では、館主が一人で仕事をしていたわけではなく、豊かな才能と意欲にあふれた研究者や、実際に農林漁業に従事していた多くの農民や漁民の方々を交えての、大型の共同体でした。敬三はその方たちを、同志ないしはパートナーと考え、毎夜銀行から帰宅すると、皆でおそくまで議論を交わし、そのなかから沢山の斬新な構想が生まれました。昭和九年には、二一名のグループが結成され、十島丸という船をチャーターして、当時日本でもっとも交通が不便だといわれた薩南十島を歴訪しましたし、また朝鮮半島では、達里という農村の衛生調査に参加したあと、同学の人びとともに多島海の村々の周遊調査をおこなうなど、興味深いプロジェクトが次々と実現しました。

敬三自身も週末になると、土曜の夜行で調査旅行に出発し、日曜の夜行で帰京、駅から直接銀行に出勤するなど、全速で走り続けていた姿が、わたしたちの記憶には鮮明に残っています。結果としては、それが仇となって敬三は健康を損ない、早すぎる死を迎える事になるのですが、当時の敬三は、日を追って激しさを増す戦争状況のなかで、研究者の多くが応召し、多くの仕事が中断され、自分も日銀の副総裁にスカウトされるなど「屋根裏部屋の博物館」に遺された時間が余りにも少ない事を、身にしみて知っていたのだと思います。

渋沢敬三（1896〜1963）。日銀総裁室にて。（提供・渋沢史料館）

渋沢敬三が遺したもの

そうしたなかでも、民具の収集は歴史的な企画となりました。幾多の試行錯誤の末、『民具問答集』という、貴重な書物の出版とともに、全国から集められた二万点におよぶ民具は、敬三の死後十数年を経て、千里に建設された国立民族学博物館に、所蔵展示される事となりました。達里をはじめとして朝鮮半島で収集した多くの民具も、ともに収納されていますが、その存在は現在の韓国で高く評価され、ソウル大学などの努力で数年前、立派な図録が発行されました。ちなみにみんぱくの初代館長、梅棹忠夫氏が、「この博物館は故渋沢敬三氏の遺言によって作られたものだ」といわれたことを敬三も、没後五〇年に際して、心から喜んでいる事と思います。

昭和十年代のアチック

市川信夫
NPO法人高田瞽女の文化を保存・発信する会会長

アチックでの市川信次の送別記念会。一列目、右から4番目が渋沢敬三、5番目が市川信次。昭和11年ごろ。『柏葉拾遺』より

父とアチックミューゼアム

わたしの父市川信次は、アチック同人に加えていただき昭和九（一九三四）年一一月より、同一一（一九三六）年八月までアチックに住み込みで日本各地より送られてくる民具の整理や採集者との連絡や指導にあたっておりました。文字どおり渋沢敬三先生の膝下にあって朝夕にご指導を受けられる人生で最高の時期でした。

この時期のアチックは研究規模の拡大につれて手狭になり新築改装がおこなわれたばかりで、研究所のインフラ整備とともに人材も必要となっていたようです。父は二十代のころから柳田國男先生の郷土研究会に入り、盲目の旅芸人瞽女の実態調査などをしていましたが、同じ柳田門下で信次が交誼を深め尊敬していた早川孝太郎さんの薦めで渋沢先生にお会いしました。先生はアチックを案内して下さり、二階の民具置き場の隅にある熱帯魚の水槽で餌をやっていた書生に、異常はないかと訊かれ、書生が昨夜水中ポンプを修理した後電源を入れるのを忘れて、一晩中ポンプ無しだったと話すと「ほう……一晩なら大丈夫か」と言われました。信次は会話の意味がわからず、またこの高価で泳ぐ宝石などといわれ、金持ちのインテリアなどに飾られ珍重される熱帯魚を物置で飼うのも不思議でした。しかし次の先生のことばで疑問は氷解しました。

「一晩か……それなら海のない信州の山の子にも見せられるな。トラックで運ぶか、計画を作ってみてくれ」。信次はそのことばで先生の人柄に触れたと思いました。そのころの日本には、満足な水族館や動物園、植物園もありませんでした。先生は国民教育にミュウゼアムは不可欠と考えておられました。熱帯魚の水槽ひとつでも学問であり、教育だと言う先生に触れ信次は感動で震えたといいます。この先生にこそ従っていこう。「この建物の管理と民具の整理を頼む。いつから来てくれるかね……」と尋ねられ、信次はさっそく田舎の家を畳み、上京しました。

先生を訪ねる

父はよく家族にアチックの話をし、長男で小学校の教員をしていたわたしを、アチックで行事のある度に連れて行ってくれました。あるとき「宮本記念財団」の宮本端夫さんに「当時の同人はほとんど亡くなって、ジュニアも高齢になった。そのなかでいちばん先生に多く接したのはあんただ。記録を残して下さい」と言われました。先生のご逝去の二〇日ほど前、わたしの上京を知って父が「地元で評判の生そばを持って先生のお見舞いに行ってこい」と言いました。三田綱町の坂道をとぼとぼ登ってアチックの玄関先に置いて失礼しようと思っていたところ書生が「先生がお会いになります」と、応接間へ通されました。先生はわたしを見てにこっとされ「よく来た、お父さんは元気か」と言われ、やがて旅行で高田へ来られたこと、小学校のとき佐渡へ行かれたことなど旅の思い出を楽しそうに語られました。ご病状を心配してはらはらして聞きましたが、やがて書生が「お時間です」と迎えに来て、病室へしっかりした足取りで去って行かれました。帰りの夜汽車のなかで、お疲れではなかったか、と反省するとともに、わたしども未熟な親子にしっかりやれとご縁を下さったと思いました。

先生の訃報を聞いた日、父が「先生は欅がお好きだった」とぽつんと言いました。大樹はあまりに早く常世の人になられてしまいました。

フィールド・サーベイのはじまり

渋沢敬三と土屋喬雄の卒論と実証主義

由井常彦
公益財団法人三井文庫常務理事・文庫長

龍門社青淵翁伝記資料室員。日本橋井上にて。左端が渋沢敬三、右から3番目（いちばん手前）が土屋喬雄。昭和12年。『柏葉拾遺』より

あべこべの研究テーマ？

渋沢敬三と土屋喬雄（東京大学名誉教授、日本経済史）は、高校（旧制）から大学を通じてクラスメートであり、終生の親友であった。小稿は二人の卒業論文に着目し、その意義について考えてみたい。

二人が仙台の第二高校文科に入学して机を並べたのは大正四（一九一五）年のことで、同七（一九一八）年東大法学部経済学科（翌年学部となる）に進学し、同一〇（一九二一）年に卒業した。ともに銀行・貨幣論の第一人者、山崎覚次郎の演習に参加した。研究のテーマは、渋沢敬三が「日本の工業の発展段階」、そして土屋喬雄は「明治日本の銀行史」であり、卒論は、その成果をとりまとめて作成され、提出されている。

二人が学生の大正期の日本は、第一次世界大戦の影響による好景気で、国内の諸産業も金融も活況を呈し、工業化が促進された。だが他方で米騒動（大正七年）が全国に波及し、社会問題が現実化し、思想的には大正デモクラシーの風潮が昂揚した。こうした時代背景において、二人の研究テーマは問題意識が明確で、有意義な研究といえる。しかし、渋沢敬三と土屋喬雄のそれぞれの経歴と将来からみれば、二人のテーマはむしろ逆ではないかとの違和感をもたざるをえない。

渋沢敬三の方は祖父の栄一の強い要請のもと、既に家督の相続が決定していた。卒業後は祖父の手になる第一銀行の役員となり、いずれ頭取になることは約束されていた。とすれば、銀行史の研究こそふさわしい。それに対し工業の発展段階の研究の方は、経済史家たることを決意していた土屋がまず取り扱うべきテーマ、と常識的に考えられるからである。

原点は卒業論文に

だがよくよく考えると、二人のそれぞれのテーマは、安易な途を避け、学問をしっかりと身につけるうえでは賢明な選択であった。何よりも事実の論証を尊ぶ、指導教授の山崎覚次郎の意向と助言で決まったことが十分にうかがえるからである。

山崎は銀行論ばかりでなく、経済史の講義も担当する大家であった。研究については厳格、厳密であることで知られていた。長期間ドイツに留学しており、当時有力であったドイツ歴史学派の研究に通じていた。そこで渋沢敬三に、K・ビュッヘルの工業発展段階論を参考に、自分の足で国内各地の工業の発展を調査研究し、商工業の知識を深めるよう指導したことは、大いにありうることである。そして土屋喬雄には、経済史家としてまず銀行史から着手するよう奨めたであろう。

ところで敬三にとっては、中学生時代から旅行・登山を好み、生物の収集と分類に親しんでおり、高校時代には東北各地の農村を旅し、伝統的な農業の調査を手がけたいと思っていた矢先のことであった。実態調査、実証研究は彼の望むところであった。

かくて敬三は、全国的に発展していた織物業を対象に選び、とくに関東各地の機業地に出張して、資本と経営、原料と技術、販売と流通などについての先駆的なフィールド・サーベイを試みた。なかでも木綿の産地での行田の足袋は大いに彼の興味の対象となった。

さて、二人が卒業してから一〇年たったのち、学会はいわゆる資本主義論争で沸きかえった。マルクス主義的ドグマを至上とする「講座派」に対して土屋喬雄は、「労農派」を代表して対抗したが、批判の要旨は、講座派の論証不足をつくものであった。争点のひとつは、幕末の工業発展の理解にあったが、ここで土屋は敬三の実証研究を大いに活用している。渋沢・土屋コンビはその後『渋沢栄一伝記資料』をはじめ社会経済史の分野でも膨大な業績をあげるが、原点は二人の卒業論文にあったのである。

まなざしの広がり

北海道・樺太、台湾、朝鮮半島の収集資料

齋藤玲子（さいとうれいこ）
民博 民族文化研究部

発展する博物館

特別展のタイトルは「屋根裏部屋（アチックミューゼアム）の博物館」だが、展示場の二階では、渋沢敬三が深くかかわったもうひとつの博物館を紹介している。

渋沢は一九三四年に設立された日本民族学会の理事に就任し、一九三六年には国に「日本民族博物館」設立を建議したが、なかなか進展しなかった。そこで、渋沢は一九三七年に保谷（ほうや）村（現西東京市）に土地をえて、学会附属の研究所と博物館の建物を造り、研究員を置き、手狭になっていたアチックミューゼアムの民具を学会に寄贈した。このころから、海外（つまりは日本の植民地であるが）での調査が積極的におこなわれ、民具収集の活動には多くの研究者らが加わり、コレクションも多様化していった。一九三九年に日本民族学会附属民族学博物館（以下、学会附属博物館）が開館した際には、日本の民具をはじめ、北海道・樺太、台湾、朝鮮半島およびミクロネシアの資料など約六〇〇点が陳列されていた。このうち今回の特別展ではミクロネシアをのぞく資料を展示し、アチックミューゼアムの関心の広がりとともに、これらの資料が今日どのように利用されているかも例示している。

三つの「海外」調査

台湾、南樺太、朝鮮がそれぞれ一八九五年、一九〇五年、一九一〇年に日本の統治下におかれて以降、現地の役所や「内地」から派遣された役人や研究者らは、各地の慣習や社会組織など伝統的な文化の調査をおこなった。アチックミューゼアムの同人や日本民族学会の会員らも、おもに一九三〇年代から終戦までに多くの資料を収集している。

学会附属博物館に収蔵されていた樺太資料の多くは、一九三七、三八年に学会が北方文化調査隊として派遣した研究者らが収集した樺太アイヌ、ウイルタ、ニヴフなどの民具である。北海道アイヌの資料は、アチックミューゼアムの時代から収集がおこなわれていた。また戦後の一九五〇年に、学会附属博物館の野外展示としてアイヌの伝統的な家屋が建築され、そのときの儀礼具や建築材料の一部も資料として残されている。

台湾の民族資料の大部分は、当時の台湾原住民族研究の第一人者であった馬淵東一（まぶちとういち）と鹿野忠雄（かのただお）が一九三〇年代に収集した。二人は台湾の高等学校や大学に学び、原住民族の社会に深く入り込み、その文化についての調査を進めながら、資料を収集していった。彼らのフィールドノートはみんぱくのアーカイブスにあり、重要な学術資料である。

朝鮮半島については、渋沢が支援していた留学生・姜鋌澤（カンジョンテク）の出身地である蔚山（ウルサン）の資料がまとまったものである。一九三六年に姜は学生らを組織し、アチックミューゼアムの同人とともに農村の在来の生活を調査し、民具を収集した。この調査でも、動画フィルムや写真・ノート類が残されており、渋沢史料館、宮本記念財団、神奈川大学常民文化研究所に所蔵されている。

なお、渋沢自身も台湾には一九二六年に、朝鮮半島には一九三三年と一九三六年に訪れており、報告書や見聞記などを残している。

今に活かされる資料

学会附属博物館は一九六二年に閉鎖され、このときまでに集まった民族資料は国に寄贈されたのち、一九七五年に開館準備中だったみんぱくに移管された。

急激に近代化が進む時代に収集されたこれらの民具は、現地にもあまり残されておらず、貴重な学術資料となっている。みんぱくに所蔵されたこれらの資料は、長いときを経て、現地の人びとによって改めて調査がおこなわれ、文化資源として役に立っている。各地では、里帰りの展示会も開かれ、祖先の残したものをもとに、あらたなものづくりも始まっている。

民博の外来研究員として、所蔵資料を調べるアイヌの工芸家たち。特別展では、この調査をもとに複製した前掛けを借用して展示している（2011年　撮影・伊藤敦規）

朝鮮半島の展示

台湾の展示

アイヌの伝統家屋の展示

北海道・樺太の展示

民俗学者の絵心

木村裕樹　龍谷大学非常勤講師

残された資料群

二〇〇一年にみんぱくで開催された企画展「大正・昭和くらしの博物誌　民族学の父・渋沢敬三とアチック・ミューゼアム」は、みんぱくの所蔵するアチックミューゼアムのコレクションに光を当てた最初の展示であった。

近藤雅樹先生を代表とするアチックミューゼアムの共同研究会がはじまったのは、一九九九年である。わたしはその年から参加させていただいているが、企画展終了後は、もっぱら未登録資料とされるコレクションの全容解明に意が注がれた。これは文部省史料館からみんぱくへの移管時に、未整理のまま残された資料群である。リンゴ箱や段ボールに収納されていたそれらは、調査の結果、四〇〇〇件近くあることが判明した。全資料の登録を目指して、台帳との照合作業など、地道な努力が現在も続けられている。

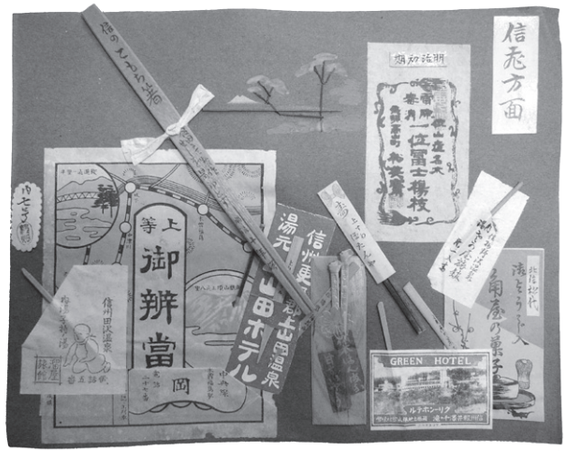
研究所附属の陳列館の構想

未登録資料のなかで、わたしが注目しているものに、樋畑雪湖（一八五八～一九四三）の収集した、つま楊枝のコレクションがある。各地の名物名産や口中衛生の観念を知る手がかりとなる貴重な資料であるが、ボール紙の台紙にレイアウトされたつま楊枝からは、遊び心が感じられる。

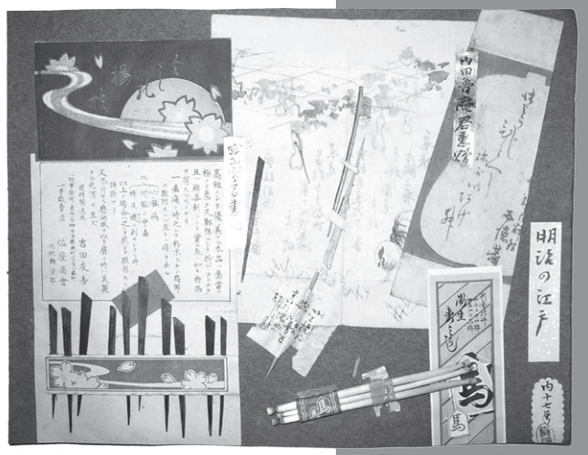
雪湖は、志賀重昂の『日本風景論』に挿絵を提供した画家としてよく知られている。また、『江戸時代の交通文化』を著した交通史家、あるいは切手や絵はがきなどの郵趣研究家としての顔もあるが、本務は逓信省の官吏であり、明治三五（一九〇二）年に設立された、逓信博物館（来年三月、リニューアルオープン予定の郵政博物館）の生みの親として、その運営に貢献した。

この博物館は、雪湖によると、切手の図案作成や郵便機械の改良といった実用的研究をおこなう「研究所附属の陳列館」であった。また、展示資料を雪湖自らポケットマネーで購入、寄贈したことや、展示品にもとづく「実物教育」を重視したことなどは、渋沢敬三の博物館構想にも影響を与えただろう。ただし、雪湖は、アチックよりむしろ「実業史博物館」とのかかわりの方がつよい。これは、敬三が祖父栄一の顕彰をきっかけに提案した「近世経済史博物館」であり、雪湖は、創設の準備にあたり商工関係の資料を数多く収集している。戦争の激化にともない、実現しなかったけれども。

みんぱくの第三収蔵庫にある整理中の未登録資料



ボール紙に貼られた雪湖のつま楊枝コレクション。標題に「信濃方面」とある



ボール紙に貼られた雪湖のつま楊枝コレクション。標題に「明治の江戸」とある

アチックに集った仲間には、雪湖同様、絵画を学んだ者も多かった。民具の研究を推し進めた敬三は、文字やことばの採集だけでなく、眼前にある対象をまるごととらえようとした。「渋沢民俗学」は、モノの収集、展示はもとより、写真や一六ミリ映画の撮影、絵画史料の分析などをとおして、庶民の生活記録の掘り起しに努めたのである。

近藤先生自身も、武蔵野美術大学で洋画を学ばれるとともに、民俗学者の宮本常一に師事された。卒業後は、財団法人日本常民文化研究所の研究員をされながら、絵描きとしての仕事もされている。

近藤先生作画の子ども向け展示解説書。茶目っ気たっぷりにして真面目な漫画は、雪湖の遊び心にも通じるよう

切り離せない人格

本誌二〇一〇年三月号の特集は「ふたつの『みんぱく』――武蔵野から千里へ」であった。これは、敬三と高橋文太郎、ならびに今和次郎らによって、保谷（現西東京市）に設立された「民族学博物館」発祥地、銘板除幕式におよんだものである。そこに、近藤先生が参加記を寄せておられるのであるが、思い入れの強いプロフィールが脳裏を離れない。

「イラストレーター、兵庫県立歴史博物館学芸員などの経歴がある。わたしの『夢』は、みんぱくで渋沢敬三没後五〇周年記念の特別展を実現し、退職したら『日曜画家』になること」。

そこで、わたしは、敬三の次のことばを思い出す。「学問と実業とをふたつにわけて考えることがむしろ間違いで、人間はもとはひとつだと思う」。

絵描きと民俗学者は切り離せない人格である。アチックの研究を支えたのは、そんな多才な顔をもつ仲間たちである。

渋沢敬三没後五〇周年を記念する本特別展に、実行委員長としてご尽力されていた近藤雅樹教授が去る八月三日に亡くなられました。本特集号の企画にもご協力いただきましたが、「アチック」をライフワークのひとつとされていた近藤氏ご自身に、特別展に寄せる思いをここにつづっていただくことができなかったのが残念でなりません。

国際フォーラム「在外資料の調査研究Ⅱ―バルト海周辺地域の日本コレクション」の際の近藤雅樹教授（2012年、撮影・岡田祐子）

近藤氏の横顔は、みんぱくホームページ「民族学者の仕事場」に紹介されています。ぜひ、ご覧ください。

http://www.minpaku.ac.jp/museum/showcase/fieldnews/shigotoba/kondo/wp

似たモノさがし

似てるけどどこか違う
似てないようでどこか似てる
いろんな工夫や思いを映す
みんぱくの所蔵資料

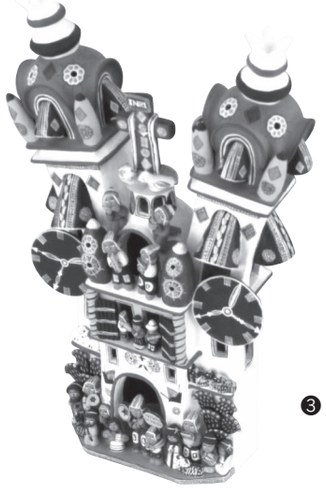
屋根から天空へ

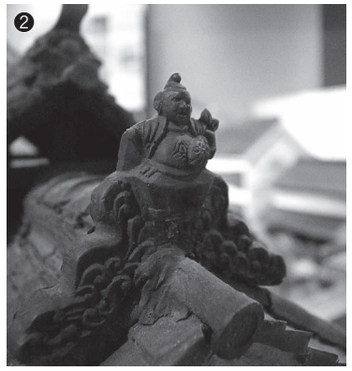
久保正敏（くぼ まさとし） 民博 文化資源研究センター

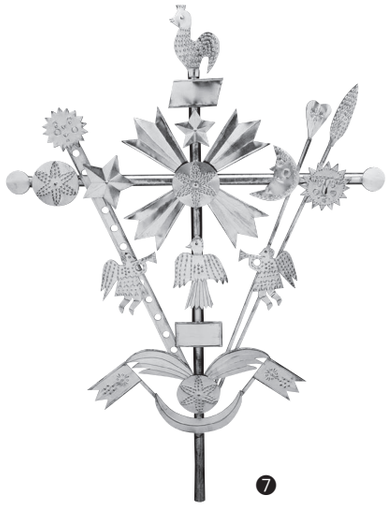
一九二〇年代初頭のアメリカでは、アマチュア実験家たちが車庫や屋根裏で装置を自作し、音声の無線送受信を個人的におこなっていた。現在のアマチュア無線家の先駆である。やがて政府の管理下でラジオ放送制度が整備され、個人の自由な送信は抑制されていくのだが。そういえば、アップルの創始者スティーブ・ジョブズとスティーブ・ウォズニアックが、機関や企業のみが入手できた高価なコンピュータを個人に解放しようと、一九七六年に最初の商用パソコンを製造したのも車庫だった。車庫や屋根裏は、個人の自由を指向するモノ好きやメカマニアの男の城だったのだ。東京・三田の渋沢邸に建てられた車庫の屋根裏で、渋沢敬三、鈴木醇（じゅん）、宮本璋（あきら）ら中学校以来の友人たちが一九一八年ごろから収集し始めた動植鉱物標本を収蔵する棚から始まる、と敬三自身が回顧しているアチックミューゼアムも、そうした男の城が出発点だったにちがいない。

であるならば、非日常的な隠れ家である屋根裏は、コレクターや好事家たちが、そこを根城に前衛を作り出す場なのかもしれない。それは屋根が家のなかでもっとも高い位置にあって天や神に近い領域、あるいはそうした領域と現世との境界であるからだろうか。ちなみに『季刊民族学』七四号（一九九五年、千里文化財団）で佐藤浩司たちが語るところによれば、インドネシア・スンバ島に特徴的な、とんがり帽子のように棟の高く突きでた独特の家屋では、屋根裏は神に捧（ささ）げられた空間だという。

そうした目で見ると、屋根や破風に取り付けられるさまざまなモノには、共通点がありそうだ。家の高い位置に取り付けて、飾りも兼ねて超自然の存在にアピールし、家を守ってもらおう、あるいは、彼らと交信しようとするのだろう。魔除け、幟（のぼり）や鯉のぼり、あるいは超自然の存在に降臨してもらう依（よ）り代（しろ）のたぐいも、そのあたりが起源であるらしい。というわけで、特別展「屋根裏部屋の博物館」にちなみ、屋根に縁のある所蔵資料から、人びとが屋根から天空にかける思いを考えてみたい。







❶屋根飾り、ニューカレドニア（フランス領）、幅 18 × 長さ 106 × 厚さ 4cm、H0125055

❷大和棟の 1/10 模型の屋根に鎮座するえびす様の鬼瓦、日本、H0009512
本館展示場でご確認あれ

❸教会の置物、ペルー、幅 40 × 高さ 63 × 奥行 20 cm、H0210703

❹鬼瓦、日本、幅 51 × 高さ 30 × 厚さ 43 cm、H0129205

❺鯉のぼり、日本、幅 15 × 長さ 42 cm、H0119852

❻住居用 装飾板、インドネシア（民族：バタク）、幅 51 × 高さ 120 × 厚さ 7 cm、H0000201
伝統的な家の前面のつき出した梁にとりつけられる

❼屋根用十字架、ペルー、幅 72 × 高さ 101 × 厚さ 6.4 cm、H0210641
新築の屋根の棟飾り

❽倉庫の 1/3 模型の正面にある屋根飾り、ニュージーランド（民族：マオリ）、H0008069

❾屋根用十字架、エチオピア（民族:アムハラ）、幅 13 × 高さ 33 × 奥行 13 cm、H0175111
教会の屋根に置かれる

※寸法は計測時の最大値を示す。

みんぱく Information

特別展

「渋沢敬三記念事業
屋根裏部屋の博物館――Attic Museum」

日本銀行総裁、大蔵大臣を歴任した渋沢敬三はまた、邸内に私設博物館兼研究所を設立した民俗学者でもありました。本展では、渋沢敬三の経歴と民俗学研究を紹介します。

会期　12月3日（火）まで
会場　特別展示館

企画展
「台湾平埔（へいほ）族の歴史と文化」

平埔族の人びとが民族のアイデンティティを再構築するようすを紹介します。国立台湾歴史博物館との国際連携展示です。

会期　11月26日（火）まで
会場　企画展示場A

みんぱく×MBSラジオpresents
「行って！わかった！これがびっくりリアル世界だ。」

「60日間ほぼ世界一周」河田直也さん（MBSアナウンサー）と、「狩猟採集民をおって世界をめぐる」本館教授池谷和信によるトークイベントです。司会は、古川圭子さん（MBSアナウンサー）です。

9月16日（月・祝）に開催予定でしたが、台風のため延期となり次の日程で振替開催します。

日時　11月4日（月・振休）
　　13時30分～14時30分（13時開場）
会場　講堂（定員450名）
※申込不要、先着順、参加無料
※当日10時から講堂入口にて整理券を配布

佐々木高明先生追悼シンポジウム
「日本文化のしくみ――その多様性を考える」

佐々木高明元館長の学説の概要を紹介し、日本の民族学史の中に位置づけるとともに、どのように評価され、学問的に展開されてきたかを検討します。

日時　11月9日（土）13時～16時30分
会場　講堂（定員450名）
※申込不要、先着順、参加無料

カムイノミ（神への祈り）

みんぱくに収蔵されているアイヌの標本資料への感謝と安全を願い、（社）北海道アイヌ協会の協力をえて、カムイノミをおこないます。あわせて古式舞踊も披露します。どなたでも見学できます。

日時　11月21日（木）　10時30分～
会場　本館　玄関前広場
※雨天の場合は、特別展示館休憩所（BF）にて開催

アイヌ工芸in みんぱく

アイヌ民族が培ってきたもの作りの技術や知恵、伝統から創造された数々の作品にふれてみませんか。

アイヌ協会優秀工芸師による「刺しゅう」や「木彫」の実演が行われます。

日時　11月21日（木）～24日（日）　11時～16時
会場　本館1階エントランスホール
※観覧無料

◆もの作りワークショップ
・「糸巻き」にアイヌ文様を彫ってみよう
・「布コースター」にアイヌ文様を施してみよう

日時　11月21日（木）～24日（日）11時～15時
会場　本館1階エントランスホール
※参加費　各500円
※申込不要、先着順、各日10名ずつ

北大阪ミュージアムメッセ

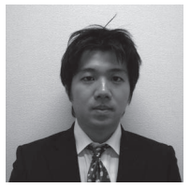
北大阪7市3町の美術館、博物館が、2日間限定でみんぱくに大集結します。期間中は、楽器演奏によるコンサート、地域の民俗芸能上演などが開催される予定です。

日時　11月3日（日・祝）、4日（月・振休）
会場　本館エントランスホール及び特別展示館休憩所（BF）

【研究部の新メンバー】

丸川雄三（まるかわゆうぞう）准教授（先端人類科学研究部）が10月1日付けで着任いたしました。国際日本文化研究センター文化資料研究企画室准教授を経て現職。専門は連想情報学による文化財情報発信の研究。開発に携わった主なウェブサービスに「文化遺産オンライン」、「国立美術館遊歩館」、「想――MAGINE早稲田大学演劇博物館」などがある。

河合洋尚（かわいひろなお）助教（研究戦略センター）が9月1日付けで着任いたしました。国立民族学博物館・機関研究員を経て現職。専門は、社会人類学、都市人類学、漢族研究。著書に、『景観人類学の課題――中国広州における都市環境の表象と再生』（風響社）などがある。論文「中国系宗教の日本への適応と変容」にて、2001年安田三郎賞受賞。



●無料観覧日のお知らせ

11月3日（日・祝）、16日（土）、17日（日）は、特別展示、本館展示を無料で観覧いただけます。

ただし、3日（日・祝）については自然文化園を通行される場合、入園料が必要です。

●展示場リニューアルのお知らせ

展示場リニューアル工事のため、朝鮮半島の文化・中国地域の文化・日本の文化（沖縄の文化）が閉鎖されます。

期間　11月7日（木）～
　　2014年3月19日（水）

●展示場一部閉鎖のお知らせ

本館2階展示場の空調設備更新のため、左記の期間、展示場の一部閉鎖をいたします。その間は観覧無料となります（ただし自然文化園（有料区域）を通行される場合は、入園料が必要です）。ご理解とご協力をお願いします。

1. 12月5日（木）～2014年1月22日（水）
音楽の一部、言語、南アジア、東南アジア、中央・北アジア、アイヌの文化、日本の文化、ナビひろば、休憩所が閉鎖されます。

2. 2014年1月23日（木）～2月19日（水）
オセアニア、アメリカ、ヨーロッパ、アフリカ、西アジア、音楽の一部が閉鎖されます。

※各イベントについてくわしくはホームページをご覧ください。
※電話でのお問い合わせの受付時間は、9時から17時（土日祝を除く）です。

刊行物紹介

■池谷和信 編
『ネイチャー・アンド・ソサエティ研究 第2巻
生き物文化の地理学』
海青社　定価3,990円

私たちは、さまざまな生き物との共存なしでは生きてはいけません。本書は、「野生動植物」、「家畜・栽培植物」、「ペット・鑑賞植物」に生き物を分けることから、生き物と人とのかかわりかたを地球的な視野から展望します。

みんぱくホームページ　http://www.minpaku.ac.jp/　　電話でのお問い合わせ　06-6878-8560（本館 広報係）
みんぱくフェイスブック　http://www.facebook.com/MINPAKU.official

みんぱくゼミナール

会場　国立民族学博物館 講堂
時間　13時30分～15時（13時開場）
定員　450名（当日先着順）
参加費　無料（展示をご覧になる方は、観覧料が必要です）

第426回　11月16日（土）
【企画展関連】
台湾平埔（へいほ）族の歴史と文化
講師　野林厚志（国立民族学博物館 教授）

機を織るクヴァラン族の女性（19世紀末頃）

台湾において、早くから漢族の影響を強く受け、慣習、言語、物質文化が大きく変化していった平埔族の人びとは、近年、歴史史料や博物館資料を手がかりに自分たちの歴史を見つめなおし、民族アイデンティティを再興させています。今回のゼミナールでは平埔族の歴史と文化を紹介し、エスニシティが再生される過程を考えます。

第427回　12月21日（土）
カザフの死者儀礼――日常から展望するイスラーム
講師　藤本透子（国立民族学博物館 助教）

大規模な死者儀礼の一場面

死者のためにクルアーン（コーラン）を唱え、盛大な肉料理でお客をもてなし、馬上競技に熱くなる。カザフ人にとってのイスラーム（イスラム教）は、私たちが想像するイスラームとは少し異なります。マスメディアで「厳格」「過激」というイメージが先行しがちなイスラームについて、カザフスタンの草原に暮らす人びとの日常から考えます。

友の会

国立民族学博物館友の会　電話 06-6877-8893（平日9時～17時）　FAX 06-6878-3716
http://www.senri-f.or.jp/　　e-mail minpakutomo@senri-f.or.jp

友の会講演会（大阪）
会場　国立民族学博物館 第5セミナー室
定員　96名（当日先着順、会員証提示）

第426回　12月7日（土）14時～15時
【フィールドワークを語る】
ドリアン王国探訪記
講師　信田敏宏（国立民族学博物館 准教授）

『ドリアン王国探訪記』は、私がマレーシアの先住民オラン・アスリの研究のために、2年半現地に住みこんで調査をした時の体験をまとめた本のタイトルです。「ドリアン王国」は、オラン・アスリの世界を架空の王国になぞらえて称したものです。異文化ならではの失敗やトラブルを経験しながら、何とか首長の養子になる儀礼を経て、村に受け入れてもらうまでの体験をお話しします。その儀礼の様子を収めた映像もお見せします。

第427回　1月11日（土）14時～15時
【みんぱくコレクションを語る】
中央アジアの民家の現在
講師　藤本透子（国立民族学博物館 助教）

東京講演会
会場　モンベル品川店2Fサロン
定員　60名（要事前申込）

第107回　12月21日（土）14時～15時30分
【ビデオテークより】
婚礼に映しだされるインドのいま
講師　三尾稔（国立民族学博物館 准教授）

盛大なことで知られるインドの婚礼は、経済発展を背景にますます華麗におこなわれるようになっています。婚礼にうつしだされるインド社会の現在の姿はどのようなものでしょうか。また婚礼にかける人びとの思いはどうでしょうか。インド西部のラージャスターン州で2012年に行った取材に基づくビデオテーク映像の一部をお見せしながら、インドの婚礼の変わりつつある部分と変わらない部分について考えたいと思います。

※申込は参加者名、連絡先を明記して上記友の会までメール、FAX、ハガキにて。

国立民族学博物館ミュージアム・ショップ

電話 06-6876-3112
FAX 06-6876-0875
e-mail shop@senri-f.or.jp
水曜日定休

ウェブサイトもご覧ください。
オンラインショップ
「World Wide Bazaar」
http://www.senri-f.or.jp/shop/

みんぱくオリジナルカレンダー「植物と暮らす」

2014年のみんぱくオリジナルカレンダーのテーマは「植物」。みんぱくの展示・収蔵資料のなかで、草花や樹木と人びととのかかわりをあらわす12点を選びました。

人間の生活にとって、植物はなくてはならない存在。食糧だけでなく、服飾品や日用品、あるいは信仰の品としてなど、さまざまな用途で活用されてきました。一年を通して、世界の人びとと植物とのかかわりを楽しみませんか。

2014年みんぱく
オリジナルカレンダー
「植物と暮らす」
価格：1,500円+税
※5冊以上まとめてご購入の場合は、特別価格の1冊1,200円+税
※通信販売の場合、1ヵ所につき発送手数料400円が必要です

地球ミュージアム紀行

狩猟採集文化のデパート
――インド、アンダマン島の人類学博物館

いまだ外部からの調査が許されないアンダマン諸島。狩猟・採集・漁撈という、島嶼部ではとくに消えてしまいやすい営みが政府によって保護され、残されている。この地域にある人類学博物館は、そのような人びとの現在のくらしが生きづく展示がなされていた。

池谷（いけや）和信（かずのぶ）
民博 民族社会研究部

国境に位置する南国の島々

南インドの中心都市チェンナイ（マドラス）の空港から約二時間。飛行機の窓からアンダマンの島々が見える。海岸線に沿って青色の海は美しく、北センティニーレス島は島内のほとんどがジャングルでおおわれている。聞くところによると、この森のなかでは、現在でも狩猟、採集、漁撈（ぎょろう）に従事する人びとが現代文明とはかけ離れて暮らしているというが、不明な点も多い。まもなく、アンダマン島の中心地ポートブレアに着く。

ここは、インド亜大陸のベンガルやパンジャブ地方などから多くの人びとが集まってきた街であり、国立の人類学博物館（Anthropological museum）が中心部に位置する。ここでは、アンダマン諸島およびニコバル諸島における伝統文化がおもに紹介されている。まず、この街には一九五一年にふたつの諸島を対象にした人類学の研究センターが設立され、現地調査のかたわらに民族学的資料が集められた。そして、一九五六年には政府が四つの部族保護区（tribal reserve）を設立する一方で、一九七五年に、これらの資料を保存・管理するのと同時に一般に公開するために現在の博物館がつくられた。

表象される狩猟採集民

博物館のなかに入ると、わたしは、世界中の民族、とくにネグロイドとモンゴロイドの写真を散りばめた大きな地図に感心してしまった。カラハリ砂漠のクン・サン（ブッシュマン）、コンゴ盆地のアカ・ピグミー、ブラジルのカヤポ、ロシアのコリヤーク、そして日本人など、慣れ親しんだ写真が多い。このなかにアンダマン島のジャラワやニコバル農民が含まれているのだ。いきなり地域の個別の文化に入るのではなくて、大局をとらえるような工夫がなされている。

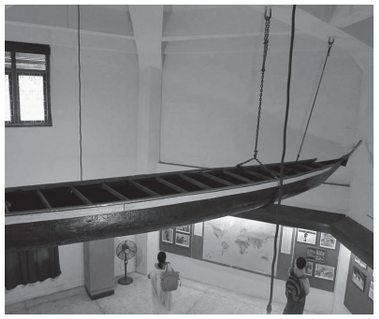
つぎに、先史や現存の狩猟採集民のコーナーがあるのが特徴である。人類は、アフリカを出て世界中に拡散をした。ここでは、マレー半島からアンダマン島に人類が移動してきたものとして、ルート図が示される。世界の狩猟採集民の一覧表があり、サケを銛（もり）でつくアイヌの写真が含まれているのも興味深い。地域に暮らすジャラワ、センティニーレス、オンゲ、ショーペンなどの民族を、地域比較の視点から位置付けている。

さらに、つぎのコーナーは、館内でもっとも重要な空間であり、ものを中心として現地の写真も併用して展示される。狩猟具や漁撈具などの資料が、それぞれの形を展示やデザインなどによって強調されて壁にはりつけられ、その上を厚いガラスがおおっている。一方で、センティニーレスの住まいは展示場の中心部に露出して置かれる簡易な建屋にすぎない。移動生活には便利なものであることがわかる。同時に、写真ではあるが、より大型のドーム状の家屋（ジャラワ）、高床の家屋（ニコバル農民）など、生活の様式に応じて家の形には多様性が認められる。また、カメやイノシシの頭骨が室内に飾られており、これらは海や森での精霊信仰を示すものになっている。

現在も生き続ける文化

これまでに、アンダマン諸島およびニコバル諸島での現地調査を許可された外国人を知らない。この地がタイとの国境に接するという要因もそのひとつのようだ。しかし、冒頭で述べたように、ここは島嶼部において狩猟や採集や漁撈が維持されてきた、世界でも最後の地域ではないかと思っている。イギリス植民地以前に知られていた一三の狩猟採集民のうち、現在では五つ（モンゴロイド四、ネグロイド一）が生存している。つまり、博物館で展示されているものが、現在でも使用されている可能性が高い。

その一方で、一九四二年から三年間、この地域を日本が統治していたという歴史を持っている。わたしたちが、この博物館に何かを貢献する方法が見つからないであろうか。そのひとつが災害に関する展示への協力である。二〇〇四年のスマトラ島沖地震による津波では、ニコバル農民は甚大なる被害を受け、狩猟採集民はそうではなかった。近い将来、東日本大震災の際の教訓をまじえて、お互いが話し合うことから始めてみたいと思っている。


天井から吊られるカヌー

海や森での精霊信仰を示すイノシシの頭骨

センティニーレスの住まい

現地調査の際に集められた民族学的資料（パネル展示）

人類学博物館の展示場

多文化をあきなう

フェアトレードタウンの世界的広がり

明石祥子（あかし しょうこ）
フェアトレードシティくまもと推進委員会事務局代表

フェアトレードを安定したものとするためには、その支持層の拡大に加え、継続的な購買層が必要となってくる。そのとりくみを、個人や単体のお店・企業の枠を超えて、まちぐるみで支持し、応援をする活動が広まりつつある。

フェアトレードタウン運動

熊本市は二〇一一年六月、アジア初、世界で一〇〇〇番目のフェアトレードタウンに認定された。フェアトレード（以下FT）とは、公正な貿易の実現を目指す、対話と透明性、敬意の精神に根ざした貿易のパートナーシップのことである。フェアトレードタウンとは、そうしたFTを「まちぐるみ」、つまり、まちの行政、企業・商店、市民団体などが一体となって応援する運動のこと。二〇一三年九月現在、FTタウンは世界で約一三五〇都市になった。人口に応じて、タウンまたはビレッジ、シティ、エリアとよばれることもある。

「市民がFTを応援する街」として、わたしがFTタウンの存在を初めて聞いたのは二〇〇三年であった。その当時、FTタウンはイギリスに一七都市。それがこの一〇年間で二四カ国に広がり、数も一気に増えた。しかし、アジアでは熊本市に続くFTタウンは未だあらわれてはいない。そのほとんどは欧米諸国にある。

二〇一三年五月リオデジャネイロでWFTO（世界フェアトレード機構、七五ヶ国四五〇団体以上の加盟）の世界会議がおこなわれた。総会では、「WFTOとしてFTタウン運動に積極的にかかわり、推進すること」が満場一致で決議された。しかも驚いたことに、近い将来FTタウンの数は三〇〇〇都市へ増えるだろうとの予測が発表された。FTタウンの世界的な拡大により「FTが普通になる社会」が実現できるのではと、内心期待している。

フェアトレードシティ熊本市誕生

熊本市の人口は七三万人。今年、地下水保全の取り組みから国連により「生命の水」最優秀賞を受賞した、世界有数の地下水都市である。また、熊本県の阿蘇（あそ）地域は世界農業遺産にも登録され、「くまモン」もゆるキャラで日本一になった。

一九九三年、熊本市の中心部にある住宅街（自宅）でFTの店をはじめた当時、FTの翻訳本が数冊はあったと記憶している。販売の度にFTの説明をしても産品の数も少なく、伝えることが難しかった。NGOを立ち上げ広報活動に務めてはいても、どうすればFTを普及することができるか悩んでいた。そんなときにFTタウンの存在を知った。FTを応援する市民が住む町が存在すれば、これまでのFTが抱える問題が解決できるかもしれない。とりわけ購買力の低さを、多くの市民の理解と実行で解決できるのではと、大きな可能性をもって取り組んだ。購買力が継続と拡大を期待できるからだ。

日本でFTタウンの認定を受けるには、FTTJ（フェアトレードタウン・ジャパン）の定める六基準をクリアする必要がある。それらは、一．推進組織の設立と支持層の拡大　二．運動の展開と市民の啓発　三．地域社会への浸透　四．地域活性化への貢献　五．地域の店（商業施設）によるFT産品の幅広い提供　六．自治体によるFTの支持と普及である。

まず二〇〇九年八月にフェアトレードシティくまもと推進委員会を立ち上げた。各基準にそれぞれ担当者を付けて、その基準内容に合うように努めた。特に六番目の基準は地元議会での承認を必要としており、とても苦労した。FTの理解を深めてもらうために、市議会議員を対象に勉強会を開催したり、市民への認知度を高めるため、一万人分の署名を集めて市議会へ提出した。NGOの若者達と手当たり次第に挑戦し、あきらめなかった。熊本市はかねてから国際交流が盛んであり、多文化共生や開発援助に関心をもつ市民が多いことも追い風だった。そして遂（つい）に、二〇一〇年一二月、熊本市議会で「フェアトレード理念周知に関する決議案」が満場一致で議決された。また、その日におこなわれた記者会見で市長も賛同の意向を表明したことで、二〇一一年六月FTシティ熊本市が誕生した。

熊本から世界へ ひとつなぐフェアトレード

二〇一四年三月二九、三〇日に第八回FTタウン国際会議が熊本市で開催される。会議の主旨は「アジアへのFTタウンの拡大」である。文字どおりアジアの国々へFTタウン運動を伝えることを目的として、各国・国内より二〇〇名の参加を見込んでいる。前日三月二八日には市民へのわかりやすいアプローチとして各国生産者のFT産品見本市、大学生のサミット、全国のグリーン経営者会議などを企画。実例としてブータンのオーガニックコットンの取り組みを紹介し、講演会、分科会などを通じて、FTをわかりやすく伝える予定だ。熊本市の共催により熊本市国際交流会館で三日間に渡り開催する。全体のテーマを「熊本から世界へひとつなぐフェアトレード」とした。世界的な広がりを見せるFTタウン運動。しかし、まだまだ市民の理解は少ない。アジア唯一のFTシティで開催される国際会議を、人と人をつなげる事から始めたい。まず、知り合い、語り合う場になればとの思いを込めている。ありがたいことに、最高のおもてなしをしたいと、たくさんのボランティアが集っている。お城祭り開催中、桜満開の熊本城を背景にして、ともに語り合う機会としたい。

ポーランドでおこなわれたFTタウン国際会議

ボリビアの生産者と筆者

ブータンのオーガニックコットン生産者と筆者

認定を記念したパレード

認定授与式

フィールドで考える

世界の空気を追って

谷本 浩志
国立環境研究所地球環境研究センター
地球大気化学研究室室長

善玉オゾンと悪玉オゾン

わたしの専門である大気化学、広義には地球科学というが、けっこう人文・社会科学と似ているなあと最近思っている。第一に、自然もしくは人を「観察する」ことがベースになる学問であるということ。第二に、地球や人の営みといった複雑系から理論を構築しようとする学問であること。そして第三に、フィールドワークが多いことである。しかも、人里離れた場所が多い。わたし自身、科学者になっても悪くないかな、と思ったのは、無味乾燥な実験室を離れ、フィールドワークにおける人との出会いがあったからである。

わたしたち人間が住む地上付近から高度約一〇キロメートルまでを対流圏といい、そこに存在するオゾンを対流圏オゾンとよぶ。オゾンは酸素原子三つからなり酸化性をもつため、そもそも生物には有害である。一方、高度一〇キロメートル以上の成層圏オゾンは紫外線をシールドしてくれているため、同じオゾンでも、成層圏オゾンは「善玉オゾン」、対流圏オゾンは「悪玉オゾン」とよばれてきた。

陸と海と空と

この対流圏オゾンの動態を地球規模で理解しようと多くの科学者が取り組んできたが、大気中での寿命が数日から数週間と比較的短いので、変動の様子やその支配要因を理解することが難しかった。地域規模や地球規模の変動をとらえたい場合、なるべくきれいな空気、つまり近傍の人間活動の影響を受けていない空気を観測するのが常套手段である。ヨーロッパではアルプス山脈で数十年にわたる観測が継続されているし、北米ではハワイのマウナロアやアラスカでの観測が有名である。日本では、四方を海に囲まれた地の利を活かして離島や半島の岬で観測をすることが多い。わたしの本格的なフィールドワークは学生時代、北海道最北端近くの利尻島から始まり、それ以降、日本では沖縄県の辺戸岬、波照間島、北海道の落石岬、長野県の八方尾根などで野外観測をおこなってきた。北半球で人間が多く住む中高緯度帯では風は西から東に吹く。日本の空気の質を詳しく知ったら、次は上流に行きたくなる。そんなわけで、最近では中国や韓国、シベリアなどで観測をおこなったり、各国の科学者の協力をえて、データをえて解析したりしている。長いときには一ヶ月も現地に滞在して観測をおこなうこともあるが、だんだん人柄、土地柄、お国柄が見えてくるから面白い。

上空の空気を知りたいときは、航空機や大気球といった「飛び道具」を使って空気を採取し観測する。コンピューターモデルによる予測をもとに、測定機器を満載した航空機を駆使して空気を追いかけるミッションは一発勝負だ。飛行機に乗り込んだ数人を大勢が地上で見守る様子は、なんともいえないワクワク感やドキドキ感がある。

一方、海の上の空気や海の水そのものを知りたいときは、研究船を利用する。船では飛行機ほど荷物の重さに制限がないため、科学者、技術者、船員を合わせて数十人もが船に乗り込んで、数ヶ月にもおよぶクルーズに出かける。見渡せど、見渡せど、海。四方八方、海。鯨の姿を見つけたときや満点の星空には大自然のすばらしさに感激するが、太平洋のど真んなかにさえ浮かんでいるレジ袋を見れば地球規模で進む環境汚染の現実を突きつけられる。目的地が近づいて陸が見えたときには、どこからともなく人が出てきて、デッキに上がり、陸の方を向いて、携帯電話の電波を確かめてみる。そして、何となく口数が増え雰囲気が明るくなる。これは何か本能的な行動なのだろう。人は陸に住む生き物なのだなと改めて思わせる一瞬である。

空はつながっている

このように世界各国でえられた観測データは、世界中の科学者に共有され、空気の質や組成に関する理解が深められている。例えば、偏西風とともに、オゾンもアジアから北米へ、北米から欧州へ、欧州からアジアへ運ばれていることがわかってきた。空はつながっているのである。英語では Air Quality ということばが日常会話でもよく使われるが、日本語で「空気質」はあまり耳慣れない。対照的に、水質ということばは日本語でも馴染み深く、これは日本が幸い水の豊かな環境にあったためかもしれないと思う。空気の味は水ほど敏感に感じられないかもしれないが、呼吸によって体内に吸い込む空気の質にもっと関心をもちたい。

八方尾根の大気観測所（国設八方尾根酸性雨測定所）（撮影・奈良英樹）

研究船「白鳳丸」の大気観測マストと米国の大気観測用航空機（中央奥）（撮影・稲飯洋一）

太平洋の珊瑚（さんご）礁

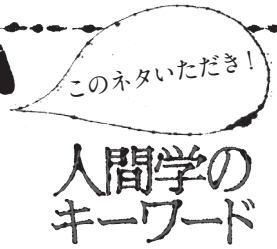
研究船「白鳳丸」から見た、ハワイ島周辺にかかる虹

分類学者C・リンネが「ホモ・サピエンス」（知恵あるヒト）と命名した人類は、二〇万年前に誕生した我々現代人の直接の祖先である新人を指す。それ以前の旧人、すなわちネアンデルタールと区別して分類する目的もあった。

これに対して「ホモ・モビリタス」（移動するヒト）は、七〇〇万年前にアフリカで誕生した猿人以降の人類すべてを含む。人類がその誕生以来、汎地球規模に移動して生活を続けたことを、端的に表現したのがこの呼称である。自然人類学者・片山一道（京都大学名誉教授）が提唱した。

地球上の動物のうち、ひとつの種がこれほど広い分布範囲をもち、異なる生態環境を克服して生息しているのは人類しかいない。アフリカで誕生して以来、森林から草原へ進出することで二足歩行を始め、アフリカからユーラシアへと移動することを繰り返しながら、人類は徐々にその分布範囲を広げてきた。ホモ・サピエンスが誕生してからは、ユーラシア大陸ばかりか、南北アメリカ大陸、オーストラリア、そして、海を渡ってオセアニアの島嶼（とうしょ）部にまで移動していったのである。

なぜ人類は移動したのか、そのもっとも重要な原因のひとつに気候変動が考えられる。温暖期に緯度の高い地域にまで移動しても、寒冷期には暖かい地域に後退することを繰り返したのはネアンデルタールだった。それに対して、寒冷環境にも適応してさらに先へと移動したのがホモ・サピエンスである。



ホモ・モビリタス
Homo Mobilitas

印東（いんとう）道子（みちこ）　民博 民族社会研究部

彼らは、気候変動から逃げるのではなく、道具や衣類を工夫することで、寒冷環境へも進出していった。脳容量が大きくなったことも、このような工夫を生み出す背景にあった。

同じように、人類はユーラシア大陸の大半の哺乳類が越えることのなかったバリ島の東をとおるウォーレス線を越えて海洋地域へと移動していった。島伝いにアジアからオーストラリアへと海を越えたのは今から約四万五千年前のことで、アメリカ大陸に人類が移動した一万数千年前よりもはるかに昔のことだった。海の向こうに見える島影を見ても動物はウォーレス海峡を越えなかったが、人類は越えていった。その差は人類のもつ好奇心と、道具を工夫するなどの文化的手段を併せもつことにあったと考えられる。

狩猟採集民が移動生活を基本としたのに対し、農耕が開始されると定住生活にシフトした。しかし、地域によっては定住農耕がかなわない環境もあり、遊牧のように移動を続ける生活を選択した人びともいた。現代社会においても、巡礼の旅やのんびりした船旅など、旅をすること自体がひとつの目的でもあるような行為は、なお続けられている。新しいこと、そして何か違うものを求めて移動する行為こそ、七〇〇万年の歴史をもつホモ・モビリタスがもち続けてきた生存戦略だとしたら、次のステップとして、月や火星の探査、宇宙空間での滞在実験が開始されつつあるのは当然の成り行きなのかもしれない。

異聞逸聞

海外で起業するベトナムの若者たち

野上恵美（のがみえみ）　神戸大学大学院国際文化学研究科

ベトナムの「働き盛り」

ベトナム戦争が終結し、三五年以上が経過した現在、ベトナムは経済発展の最中にあり、活気のある国として大きく様変わりしつつある。好景気に沸くベトナムに日系企業も注目しており、現在ではおよそ一六〇〇社の日系企業が進出しているといわれている。ベトナムの経済発展の背景のひとつとして、若者を中心とした労働人口がベトナム全体の人口の六〇パーセントを超えているという点にある。「働き盛り」が人口の大部分を占めるベトナムに、今後ますます経済発展が期待されている。そのような状況のなかで、ベトナムを飛び出し日本で起業したひとりのベトナム人女性を紹介したい。

ランさんのベトナム雑貨店

現在、神戸に住むランさん（仮名）は、一九九五年に来日した。まもなくランさんは、親戚が営むベトナム料理店を手伝いながら日本語を学びはじめた。その後、ランさんは日本人が経営するベトナム雑貨店を手伝うようになった。ランさんの魅力的な人柄ときめ細かい接客対応は雑貨店のオーナーから信頼をえることになり、ランさんはベトナムへ雑貨を買い付けに行く仕事も手伝うようになった。数年の手伝い期間を経て、ランさんは来日当初からの夢であったベトナム雑貨店を開店した。色とりどりの雑貨がセンス良く並ぶ店内には、常連客だけでなく人目を引く色鮮やかな雑貨に惹かれて通りすがりの客がかわるがわる入ってくる。

ランさんの店内の人気商品

日本で起業するということ

ランさんが日本に活躍の場を求めた理由として、すでに親戚が日本で起業していたことが大きいだろう。しかし、異国の地である日本で起業するということは、並大抵の努力では実現できないことは容易に想像がつく。ランさんも例外ではなく、来日から今日に至るまで、ひたむきに努力を重ねてきただけでなく、さまざまな苦労を経験してきた。しかしながら、若者世代が多いベトナムにおいて、海外で起業するということは、場合によってはライバルが多い国内で起業するよりも成功を掴（つか）む可能性が大きいのかもしれない。日本で起業したランさんとの出会いは、経済発展により注目が高まりつつあるベトナムがもつ厳しい側面について考えるきっかけとなった。

制服の世界
THE UNIVERSE OF UNIFORMS
世界の制服

礼装としての民族衣装

栗田靖之（民博 名誉教授）

「幸せの国」から二年前に来日した国王と王妃は、つねに民族衣装を着ていた。ブータンでは、民族衣装がいわば国民の制服なのだ。

まるでテーマパーク

ブータンの町中では、歩いている人のほとんどが男性はゴ、女性はキラという民族衣装を着ており、小学生の制服も民族衣装である。そのうえ、建物はすべてがブータン風で、はじめてブータンを訪れた外国人は、まるでブータン色に統一されたテーマパークのなかにいるかのような印象をもつ。これがブータン観光のひとつの魅力である。

しかし、以前からこのようにブータン風に統一されていたわけではない。わたしが初めてブータンに行ったのは一九七〇年だが、一九八〇年代には大半の若者がジーンズとTシャツを着ていた。その当時、古くからのブータンを知る外国人のあいだでは、ブータンもだんだんと普通の国になってきたと語り合った。

「幸せの国」へ

それが一九八九年、国王から「公式の場では民族衣装を着るように」との勅令がだされた。これが人びとのあいだでは、どんな場でも民族衣装を着るようにと命じられたと曲解された。首都ティンプーの町をジーパンとTシャツで歩いていた学生が警察官から注意されたという話が広まると、町のなかからジーパン、Tシャツ姿がいっせいに姿をけした。

しかしこのことに反発した人びともいる。それは南部を中心にその数を増やしていたネパール系住民である。その当時ブータンの人口七〇万人で、その二〇パーセント以上がネパール系住民であるといわれていた。ネパール系住民には、なぜわれわれがブータン人の民族衣装を着なくてはならないのかという釈然としない思いがあった。このことが発端となって、彼らの反発を生み、同時に彼らのなかにはブータン国内での不法滞在の人が多かったこともあって、流血の紛争が生じた。結果として数多くのネパール系住民が国外に出て難民となるという事態になった。

言語であれ服装であれ、ひとつのものに統一しようとするときには、大変な力が必要となるものである。

そんなブータンは、今日では幸せの国と知られるようになった。

ブータンの男性。伝統的には、ブータン人は裸足であった

「洋」をもって「公」となす

二〇一一年一二月、第五代サンゲ・シンゲ・ワンチュック国王が、新婚の王妃を伴って日本を訪れた。国会での演説、東日本大震災の被災地では随行してきた僧侶が追悼の法要をおこない、ブータン国王はたちまち日本人の心をとらえた。

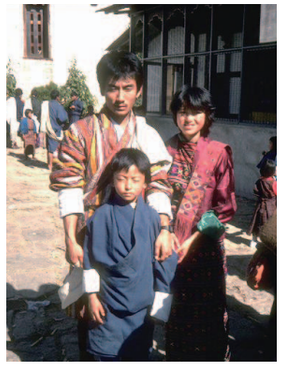
日本政府は、この国王夫妻を国賓としてもてなし、宮中晩餐会（ばんさんかい）がおこなわれた。宮中晩餐は、日本で一番格式の高いおもてなしである。日本側の陪席者には、宮内庁からドレス・コードが知らされる。それには「男子　タキシード（ブラック・タイ）、紋付羽織袴（はかま）又はこれに相当するもの。女子　ロングドレス　手袋は随意　白襟（白羽二重の襟を重ねる）紋付（色留袖、訪問着）、黒留袖も可　紋の数は随意」というものである。明治時代以降、日本では「洋」をもって「公」となすということが第一の原則であった。

この晩餐会では、ブータン側の客人は全員がゴとキラの民族衣装を着用していた。一方、日本側の男性は、ほぼ全員がタキシード姿でブラック・タイを着用していた。しかし女性は、数人の方を除いて和服姿であった。梅棹忠夫さんが『美意識と神さま』のなかでいうように、日本の女性における「公」の服装は、まだ「洋」であると決着が付いたわけではないのである。

ブータン国王を招いての宮中晩餐は、男性女性とも「民族衣装」をもって「公」とするブータンと、「洋」をもって「公」とする日本男性と、「和」をもって「公」としようとする日本女性とのそれぞれの礼装があり、それは何を最上の衣装とみなしているのかの文化的アイデンティティを意識させられる場でもあった。

ゴ　キラ

ブータンの町の風景



男性はカムネィ、女性はラチューという布を肩から掛けることで正装となる。ゾンというお城には、この正装でないと入れない

民族衣装を着た生徒たち

11月

みんぱくウィークエンド・サロン

研究者と話そう

■ 14 時 30 分から 15 時 30 分
■展示観覧料が必要です。
※都合により、予定を変更することがあります。

国立民族学博物館（みんぱく）の研究者が来館された皆様の前に登場します！
「研究について」「調査している地域（国）の最新情報」「展示資料について」など、話題や内容は実に多彩。
どんどん質問をおよせください。展示場でお待ちしております。

10日（日曜日）

話者：菅瀬晶子（国立民族学博物館 助教）
話題：それでも豚を食べる人びと
—パレスチナ・イスラエルにおける豚肉食—
会場：本館展示場（ナビひろば）
内容：豚肉食を禁忌とするイスラームやユダヤ教が多数派のこの地で、「あえて」豚肉を食べる人びととは。写真を多数お見せしながら、ご紹介します。

パレスチナ自治区の養豚場

24日（日曜日）

話者：齋藤玲子（国立民族学博物館 助教）
話題：アイヌの工芸について
会場：本館展示場（ナビひろば）
内容：アイヌの民具は機能的であるとともに、手のこんだ文様が施されたものも多くあります。アチックミューゼアムなどの所蔵品のなかにも、美的にすぐれた生活用具が含まれています。こうした古い資料を活かした、近年の工芸に関する取り組みについてお話しします。

樹皮製糸で織られた着物（民博所蔵品　特別展展示中　H0018717）

1年間みんぱくに何度でも入館できる「みんぱくフリーパス（3,000円）」をご利用ください。

本館展示は何度でも無料で入館できます。他にも、みんぱくを楽しむための特典がいっぱいです。

特典◆本館展示の無料入館◆特別展示の観覧料割引
◆みんぱくミュージアム・ショップとレストランの10%割引
◆万博記念公園内および周辺施設での利用割引　など。
詳細については、一般財団法人千里文化財団までお問い合わせください。
（電話06−6877−8893／平日9：00 ～ 17：00）

編集後記

とにかく集めまくるだけ、というコレクターは結構いる。そして世の「コレクション」の多くは個人の愉しみの域を出ない。集めた人にとってはお宝でも、その人が故人となればゴミの山として処分されてしまうことも往々にしてある。そもそもが高価な美術品でもないアチック・コレクションが、敬三の没後50年たってもお宝であり続けている、ということはすごいことなのだと思う。

個人の収集欲あるいは自己顕示欲を満足させるためのコレクションだったとしたら、今のような形では残っていなかったであろう。敬三がアチックに託した「ティームワークのハーモニアスデヴェロープメント（調和的な発展）」という理想が根本にあり、それを引き継ぐ仲間たちがいたからこそ、半世紀たってもこれらのモノは活きている。

仲間と協同してモノを集め、世のために活用する。これぞ博物館の理想的な在り方であろう。扇の要（かなめ）のように、屋根裏部屋の仲間たちをまとめ、日本の民俗学に大きな追風を送った敬三の、この精神を忘れてはならない。
（山中由里子）

●表紙　絵馬。願いを込めて、さまざまな絵が描かれる。
標本番号：H0015069 ほか
地域：日本　アチックミューゼアム・コレクション

次号の予告

特集
稲作以後

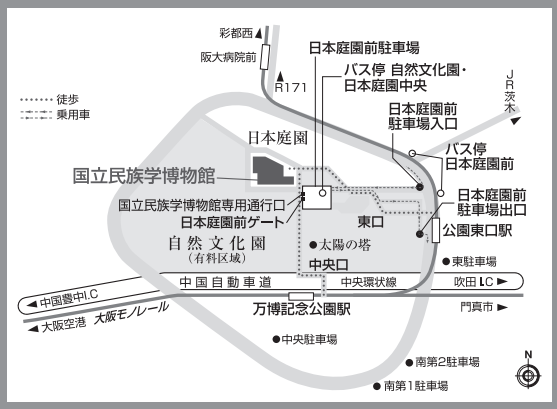
月刊みんぱく　2013 年 11 月号
第 37 巻第 11 号通巻第 434 号　2013 年 11 月 1 日発行

編集・発行　人間文化研究機構 国立民族学博物館
〒 565-8511 大阪府吹田市千里万博公園 10-1
電話　06-6876-2151

発行人　八杉佳穂
編集委員　山中由里子（編集長）　樫永真佐夫　久保正敏　庄司博史　菅瀬晶子　丹羽典生　野林厚志
編集アドバイザー　山内直樹
デザイン　宮谷一款
制作・協力　一般財団法人 千里文化財団
印刷　日本写真印刷株式会社

＊本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館広報係にお願いします。

＊本誌掲載記事の無断転載を禁じます。



交通案内
●大阪モノレール「万博記念公園駅」・「公園東口駅」下車、徒歩約15分。
●阪急茨木市駅・JR茨木駅から近鉄バスで「日本庭園前」下車、徒歩約15分。
●自家用車は、公園内の「日本庭園前駐車場」（有料）から徒歩約5分。「日本庭園前ゲート」横にある民博専用通行口をお通りください。
●タクシーは、万博記念公園「日本庭園前駐車場」まで乗り入れできます。

みんぱくホームページ
http://www.minpaku.ac.jp/
みんぱくフェイスブック
http://www.facebook.com/MINPAKU.official/